

特別セミナー 1914年桜島噴火災害に学ぶ ～地震学・火山学が減災に貢献できること～

日時 平成27年1月30日(金) 13時30分～15時30分

場所 東京大学地震研究所 第1会議室 (東京大学地震研究所2号館5階)

講師 柳川喜郎氏(元NHK解説委員)

主催 東京大学地震研究所 地震・火山噴火予知研究協議会

東京大学地震研究所地震・火山噴火予知研究協議会は、最近復刻されました「桜島噴火記」の著者で、元NHK解説委員の柳川喜郎氏をお招きし、上記の特別セミナーを開催します。講演では、1914年桜島大正噴火、1991年雲仙普賢岳火砕流災害、2014年御嶽山噴火を例に、マスコミの立場から地震や火山研究の在り方についてお話し頂き、その後、参加者を交えて議論をしたいと思っております。どなたでも参加できます。特に、大学院生、若手研究者の皆様のご参加をお待ちします。

【プログラム】

13:30 - 13:35 開会挨拶、講演者紹介

13:35 - 14:35 講演 柳川 喜郎 氏

「桜島・雲仙・御嶽ー噴火災害を考える 科学と社会の INTERFACE」

(講演に関する質問)

13:40 - 15:00 論点整理

雲仙普賢岳の火砕流災害ー研究者からの視点(九州大学 清水 洋)

学術としての地震・火山研究の役割(東大地震研 平田 直)

住民と研究者のコミュニケーション(兵庫県立大 木村玲欧)

15:00 - 15:30 総合討論

15:30 閉会

【開催趣旨】

100年前の桜島噴火では、前兆現象が観測されたものの、結果的には58名の死者を出す災害へと発展した。2014年御嶽山の噴火災害を経験し、観測研究の成果による減災の貢献が求められている現在、改めて桜島噴火災害に我々は何を学ぶべきか。NHK記者として、当時の測候所長の日記をはじめ諸資料をもとに克明に噴火災害の状況を再現した柳川喜郎氏を迎え、特別セミナーを実施する。この特別セミナーで、地震学や火山学がどのように災害の軽減に貢献できるかを研究者自らが考える機会を持ちたい。

柳川氏は、著書「桜島噴火記」(1984年6月刊行)の中で、著作のきっかけを以下の様に述べている。

『NHKで災害報道を担当している私は、8年前の昭和51年秋、東海地震の発生を科学的に予知し、社会に警戒をうながす地震予知情報を発表しようという地震予知実用化計画が、にわかに具体化しはじめたとき、正直いって途方に暮れてしまった。

なぜならば、科学技術の進歩によって可能になった地震予知の実用化それ自体は喜ぶべきことであるが、「近く大地震が起きる」という重大で緊急な、そして場合によっては危険極まりない情報を、伝達者の一人として、どうやって巧みに伝達したらよいか、わからなかったからである。



第一に、百パーセント確実な地震予知は不可能であるということである。予知情報を広く社会に伝達して確実に地震がやってくれば、それはそれなりに対応できる。だが、情報を発表しても地震がこない場合、無用の混乱だけを招くことになる。また、予知できないままに突然地震が発生すれば、「予知実用化」で予知が可能と信じていた人々は、虚をつかれて混乱し、かえって被害拡大につながるだろう。

第二に、この地震予知情報は社会に強烈なインパクトを与える。人々の日常生活や経済活動に甚大な影響を及ぼし、人心の極度の緊張でデマやパニックの発生も予想される。

このように極めて取り扱いの面倒な地震予知情報の最善の伝達方法を探し求めて、私は暗중에 模索を重ねてきた。その過程で、七十年前に桜島で起きた事件を知ったことは、私にとって一つの手がかりとなったのである。』 … 「桜島噴火記」のはじめに

の一部引用

なお、南方新社刊「桜島噴火記」は長らく絶版であったが、最近復刻され入手できる様になった。

会場案内

東京大学地震研究所 2号館5階 第1会議室
 最寄駅 東京メトロ 「東大前駅」から 徒歩5分
 東京メトロ 「根津駅」から 徒歩10分

